世阿弥

瀧川駿著

瀧川駿著

古阿彌

目次

序の段（春喧）　五
破の上段（塵声）　七三
破の中段（閨怨）　一四五
破の下段（孤鬼）　一七三
急の段（慟哭）　二四五

題簽　伊福部隆彦

写真　半部面（はじとみ）・若女（わかおんな）

吉越立雄

世

阿

弥

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序の段（春喧）

（その一）

足利義満がはじめて猿楽の観能をいいつけたのは、文中三年（北朝の応安七年）五月の、今熊野の演能である。世阿弥（藤若丸）が十二歳の年であった。それまでに義満はかって猿楽に、心を動かせたことも、興を感じたこともなかった。その義満が突如いいつけて、演能を催させたものであった。

伝説によると、義満は癇のつよい瘋癲患者のようにいわれているが、実際の彼は激しい神経質な男であったにしても、そんなに病的なほどの気違いじみた男ではなかった。一種の天才児で頭がするどく勘のいい性格は、どちらかといえば天才児にありがちな、気むらな気質の、妥協をゆるさない強情なだだっ児であった。わけて幼少のこ

ろは、病質でとくに、気むずかしいところが多く、我ままな引こみ家であった。後半生の彼の性格をべつにしていうと、彼は決して野放図な性格破産者ではなかった。若い時分の彼は行儀のいい聰明な将軍だった。その気弱な引こみ家の彼が、強情にこの猿楽の演能をにわかにいい出し気違いのように、能にこり出したのは故なきではなかった。

それは仁王入道とあだ名されていた近江の梟雄、六角佐々木高氏入道道誉の存在である。一つには義満じたいの、我ままで気ままな性格と、それがゆるされる彼の幸せな、境遇の結果であろうけれど、また一つには気弱で、面倒臭がり家の彼が、あえてやかましく強情に、それをいい張り、我執を押し通さねばならなかった当時の政治的な情勢と立場があったのである。

だから始めから、佐々木道誉を意識しての、激しい感情的なものが露骨にあらわれていた。当時の思想のあり方として、天下が伝統のない成り上り者の、足利幕府にあったので、勢い下剋上的なものの考え方が諸国に横溢しており、しかも足利幕府が諸国のその拮抗勢力の、中和的作用の上に保たれていた幕府なので、義満がそれらの勾

配の一つ一つに、激しい意識を持っていたとしても不思議ではない。覇権の存続にまことに危険率の多かった足利三代の、天下の大統を背負った彼の、生きる本能的な意欲であり、護るがためのするどい勘でもあったわけである。

諸国の勢力がほどよく均衡されていて、比較的安定していた文中年間の足利幕府のなかでも、義満は近江の道誉にだけは、つねに特別の意識を持たずにはいられなかったし、道誉にはいつも気の許せない不気味な思いを持ちつづけていた。つねになにか心にこだわる敵対的な感情があって、眼に見えない威圧が感じられるのであった。

佐々木道誉はいわゆる油断のならない無気味な家来であったのだ。その道誉がこのほどから、近江の日吉（比叡）座の猿楽をひいきにしていて、とかく義満に対してあてつけがましく、これ見よがしに覇道とは別な世界で振舞うのだ。それが若くて感情的に潔癖で、政治的にも単純な、義満の癇には強くふれるのである。だから、政治的なふかい計画もなく、ただ感情的に向かい立つ気持ちで、今熊野の観能をいいつけたものであった。

道誉は坂田城を修築して近江へ引きこもってからは、従来の佐々木六角佐渡判官入

道高氏という俗名を廃して、もっぱら道誉という法名を用いていたが、鎧ずれのした頑丈な体軀は老来ますます頑健で、矍鑠としていてたくましく、旺盛に政治的な権謀術策を用いて余念がなかった。歳はとっていてもきかぬ気の面魂で押太いしたたかさで図太く押し切っていた。とうてい尋常一様の一筋縄でいく老骨ではなかった。一癖も二癖もある骨太い老獪で、あの激しい足利の乱世を人もなげに野放図に、思いのままに振舞いぬいた大物であった。

道誉の態度はいつも攻撃的で傲岸に堂々としていた。汲々として野心の牙をとぎすまして、虎視眈々たる諸国の策謀家の上に、でんと大きく胡坐をかいて寸分の隙も見せなかった。絶えず不遜に大きく構えており、そして読みの深い棋客がむつかしい対局に立ち向かった時のように、慎重に腹をすえて用心ぶかく根気のいい執拗なねばりで闘い抜かずにおかない男であった。よく彼は徳川家康の引き合いの例に出されるが家康などとはまるで肌合いの違った大物で、じつに瑕瑾の多い無法な野人であった。

無学で教養のあさい上に、剛毅な自信があり、その上自分を遇する信念に厚くて傲岸で不屈、大抵の場合は相手を畏怖させ、辟易させずにおかなかった。そんな風だか

ら彼の眼のうちには、将軍もなければ三管領四職もない。じつに自由濶達に下剋上的なものの考え方で、気随、我ままで押しまくっていたのであった。

そんな一筋縄で行かない傲岸不遜の老獪も、年齢の枷杻には勝ちかねてか、七十の歳を越してからはそんな無法無頼の鋭鋒をおさめて、おとなしく、一族郎党とともに所領の坂田城へ引きこもってしまった。だが、生来の闘争と策謀をこのむ彼の激しい性格では、この平隠無事な生活は無聊にすぎて、彼はそのさかんな抱慨の気のはかし場所に弱っていた。そこへつれずれの慰めにとすすめる人があって、道誉は猿楽の能に気を向けて、それに熱中していたのであった。

そんな風の道誉の猿楽ではあったが、こり出したとなるとねばりがあって強靱に執拗であった。そして本来は無学であるが、家系の伝統的な才能がそうさせるのか、一見識をそなえていて鑑識眼にたかく、傲岸な彼の性格から生まれた趣味で理想がたかかった。建武以来の戦塵のなかでならされた彼の鋭い勘は、猿楽の勘どころをも敏捷にとらえてその芸術をすぐに理解した。

道誉は日吉座の犬王大夫（道阿弥）の能に心酔して夢中になっていた。だが道誉の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

場合は義満のそれのような感情問題から入った能でないので素直であった。だから正しく能を理解して熱中していたともいえる。しかし諸国の大名がつねに、幕府を意識のうちに置いて行動していたように、道誉の能の場合も自然、高倉幕府を意識の底に置いて振舞うような結果になっていたのも、当時の大名の生存状態からいってまた無理からぬことであった。

だが然しそれが高倉（当時の幕府即ち将軍義満・執権頼之）の宿意にふれない筈はなかった。義満にすれば道誉は眼の上のこぶのようないやなうるさい存在であった。尊氏の時代からつねに足利一族とともに行動して来て、彼のはら一つが幕府の存亡に関係するようなことが無いでもなかった。だけど対立して覇権を争うほどのそれでもない、といっておろそかには出来ない面倒な存在であった。

そんな風のうるさい煙ったい存在のまま、義満の時代にまでついて回ってきた幕府の、初代からの老臣なのである。そして一応は、幕府に忠誠を誓っているかのようにも見えもしたが、しかしそのじつ、腹のなかでは〝尊氏がなんだ〟という気持ちが十分にあり、折さえあれば、俺だって将軍家だという、野心も少なからずないではなか

ったのである。

尊氏が幕府を開いたはじめから、幕府の内幕を知り過ぎているだけに、心から忠誠をちかって心服する気にはなれない彼なのだ。それだけに義満らにすれば、油断の出来ない気持ちで、いつも意識の底にからみついていて、とくに彼を厳重に監視するという態度をとる。その道誉が楠木正儀撃退の住吉合戦の後、中枢部から遠のいて、領国の近江へ引き揚げたのだから、有難いといえば有難いようなものの、根がはら黒い大入道のことだけに、なにか後味のわるい無気味さを感じないでいられなかった。だから幕府としても、ちょいと彼のはらをさぐってみずにはおられない気持ちになる。

そんな気持ちからして幕府は再三、道誉の上洛を慫慂していた。だが、今までは頼んでも下国しそうにもなく京にがんばっていた道誉が、こんどは依怙地になったように上洛しないばかりか、幕府の召状に対しても返書をすら寄こさないのであった。柳営のなかでは物議をかもしていてうるさかった。わけて義満は癇性なので癇をたててやかましく、再三きつい使を出すけれど、道誉はそんなことなど屁とも思っている風がなく馬耳東風と聞き流しているのである。

激しい気性の義満はいよいよ癇をたかぶらせて、兵を差しむけて召し連れて参れと命令するけれど、道誉は悠々と猿楽をたのしんでいて、一向に尻をあげようともしなかった。義満が殊更らにやかましくいいたてるのは、一つには義満がまだ政治家としておさなかったせいでもあるが、一つには生まれながらに天下に君臨していて、気持ちから、将軍家になりきっていた彼の生活感情からでもあった。

足利三代の幕府にたった自分が、家来の道誉風情とかなえの軽重を問われることは彼の衿恃がゆるさないばかりでなく、足利幕府の今後のあり方にも影響するので見遁しがたい。わけて、ふだんから気持ちにこだわりを持っている道誉のことだけに、義満は幕府の勢力を傾けても上洛をさせずにはおかぬ——

と、かたく決心していた。

義満のそんな感情的な問題とはべつに、柳営の幕閣が坂田城へやかましくいい立てるのは、道誉の在国の籠城に、謀叛のうたがいを持ったからであった。というのは、佐々木道誉が近江へ下国して、日吉の猿楽の能にこり出したころから急に、符牒を合わせたように、日吉神社の神人が暴動を起こし、神輿をかついで上洛し、幕府に強訴

をはじめたからである。彼らの要求は日吉の神地に建立した南禅寺の山門をただちに取りこわして撤回しろ、というのにあったけれど幕府の眼から見ると、道誉が謀叛の下準備として、幕府の実力をためしているように思われて仕方がない。また日吉神社の大檀那の道誉が、そのことを前もって知っていなかったとは信じられないことであった。

だから幕府としては、日吉神人の暴動の背後を洗って見たい気持ちと、道誉入道がはたして老いはててのの逼塞なのか、それとも次の攻勢にそなえての準備のためなのか確かめずにいられない気持ちがするのであった。しかし憩える獅子の道誉は頭から幕府をなめていて、幕府の命令などには、一向応じる気配がなかった。朝から自分でもうたって能にあけくれていた。

足利義満は高慢で神経質な男だけに、そんなことには狂的にこだわってやかましかった。道誉があえて命にがえんじないと聞くと、嚇っとなって、

「兵を差し向けて、からめて参れ！」

と厳命した。しかし幕府のなかにも義満のように、面子や感情にばかりに、はしり

たがる男ばかりではなかった。わけても管領の、細川武蔵守（頼之）は深慮遠謀の、権謀的な術策にすぐれていた男なので、気ちがいじみて感情にはしり、わけも無くどなり散らす義満のその言葉を、円満にしりぞけひそかに一計を按じて道誉のおびき出しを計画していた。

それが今熊野の演能となってあらわれたと見たほうがはやい。頼之は足利二代の将軍義詮の没後おさない義満を新将軍に推して、幕府草創の業の完成し終っていなかった難局の幕閣に立ち、そして乱世のなかにとにもかくにも、足利幕府の基礎を確立したほどの傑物であった。頭がずば抜けてするどく、辨舌も達者で学識もあり、容貌も立派で、すごいほどに斬れた名政治家であった。だから道誉のような、大きく構えこんでいた単純な男は、その手のすきをたくみに読み取られて、ぎゃくに鋭く斬って返して、突いてはいられるような不始末になったのである。細川頼之は道誉が、大手から立ち向かっておちいらないとわかると、即座に搦手からの戦法をあみ出して一計を用いたものであった。

ふてくされたように寝そべっていたはら黒い獅子も、猿楽という餌じきにつられて

のそのそとその洞窟から、京のわなへはい出して来たものであった。

（その二）

義満に身ぢかく仕えていた同朋衆の南阿弥が、書き残したというもののうちに、義満の気性を形容してこんなことをいっているのがある。

――大樹様のご気性、春のあじさいに似たり……。

これはちとうがち過ぎていてかえって、後世のいたずら者の偽書が感じられるが、義満の性格をいいあてて妙である。たしかにあじさいという感じであったに違いない。大らかなようで、実はこせついてやかましく、せせっこましいようでいて一見、実にのんびりしたところがあった。甘いようでいてにがく、そして気性が刻々に変化するのも、あじさいの花に似ていたかも知れない。

いわゆる極度のお天気家の癇持ちで、むらっ気の多いだだっ児の坊ちゃんであった。大どころで甘やかされて育っただけに、潔癖でわが儘なところがあったが、それ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com